

## 「生天光手記」：沖縄の宗教的世界

安達，義弘

<https://doi.org/10.15017/2328556>

---

出版情報：哲學年報. 45, pp.215-254, 1986-02-28. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：



# 「先天光手記」

——沖繩の宗教的世界——

安 達 義 弘

ここに紹介する資料は、沖繩の一女性宗教者の手記である。この宗教者は、沖繩本島の与那城村屋慶名にあって、「生天光神明宮」という社を宗教活動の拠点とし、教団化への動きをみせている。彼女は自らを「光主」と呼ぶ。(以下、この宗教者を指す場合は「光主」と記す)。「先天光手記」という呼び方は彼女の戴いている神「生天光神」に由来している。

この「生天光手記」、および生天光神明宮の宗教活動については、かつて、桜井徳太郎氏が部分的に紹介されている(桜井徳太郎『沖繩のシャマニズム』、昭和48年、弘文堂)。桜井氏は主に、生天光神明宮の教団化活動に焦点づけられていた。筆者は、生天光神明宮の宗教的世界観へと踏み込んでいきたい。この「生天光手記」をめぐる筆者のこれからの一連の手続きは、これをテキストとし、そこに描かれている宗教的世界観を再構築し、そのシンクレティズムの形態を折出し、さらに、この宗教的世界観と宗教活動との関わりを見出すという方向へ向う予定である。ただし、ここではごく手短かに骨子を述べるに止めざるをえない。紙数の関係である。この一連の手続きを進めていく場合、沖繩の歴史的、社会的状況を常に見定めておく必要がある。

なお、やはり紙数の関係で、筆者の手もとにある「先天光手記」のすべてをここに紹介するわけにはいかない。残

りは別の機会に紹介する予定である。

処で、「光主」がどのような状態でこの手記を書くのかについての観察はない。彼女自身は「神から書かされる」という。つまり、神から指示されたものをそのまま書き写す自動手記の性質のものであることを強調する。

その宗教的世界は、沖縄社会に深く根づいているシャマニスティックな伝統宗教を背景に持っている。つまり彼女は、沖縄のシャマニスティックな職能者と同じような成巫過程をたどっている。そして、その宗教的行為の中で自由に超自然的世界と交流し、あるいは自身を媒体として神々を地上に顕現させるテクニクを駆使する。彼女の性が女性であるのも沖縄の伝統的神役の性と一致する。また「光主」はその宗教活動において、自分が「琉球古神道」を正統に継承していると自認しているし、琉球王朝文化への強い価値づけも観察される。

他方、外来宗教的要素もこの「先天光手記」の宗教的世界の中に数多く観察される。これは、ひとつには生天光神明宮の教団化への動きと関係があるのかも知れない。元来、沖縄の伝統的宗教は教団化のパターンを持たない。ここでの教団とは、宇野円空のいう、従属的宗教集団に対する特殊宗教集団を指す（宇野円空『宗教学』、昭和6年、岩波書店）。沖縄には、琉球王朝時代に制度化され、王府の崩壊とともに衰退していったノロ制度や村落レベルでの祭祀集団は存在するが、それらは宇野の分類に従えば、従属的宗教集団と呼ばれるべきものであり、ここでいう意味の教団ではない。沖縄の伝統宗教は、教団化のパターンを持たないが故に、生天光神明宮のように伝統宗教の中で身を起こし教団化へと向おうとする場合、その教団化のパターンを外から借りて来る必要がある。そこに外来宗教的要素を取り込む積極的理由のひとつが見出せる。また生天光神明宮の場合、強く普遍宗教を志向する。そこにも外来宗教的要素を取り込むひとつの積極的理由が見出せる。つまり、沖縄の伝統的文化に深く根ざしながらもそれを超越する手段として外来的要素を取り込んでいくのである。生天光神明宮の場合、日本本土の神道的要素とのシンクレティズムが著しい。「生天光手記」の中では、「琉球古神道」と本土の神道は源流をたどれば一つになると認識されてい

る。それは、「古神道」と「神道」ということばの類似から導かれた同祖論のようにもみえる。(事実はその逆で、日琉同祖論が背景となつて沖繩の伝統的固有信仰に「古神道」という呼び名が与えられたようである。)あるいは、日本本土の神道の要素を特に多く取り入れている背景には、沖繩と本土との特殊な歴史的、社会的関係があるようにもみえる。いずれにしろ、宗教的シンクレティズムの姿を折出しようとする場合、「生天光手記」は好テキストである。次に、「生天光手記」の中に観察される神観念、空間構造、時間構造などについて若干のコメントを付しておく。

△神観念▽

「生天光手記」にみえる最高神は生天光神である。多神教的宗教世界にあつて、生天光神には特別の地位が与えられている。前述したように「光主」の戴く神がまさにこの生天光神である。生天光神は宇宙大なる創造神、この世の一切の存在と法則・秩序の創造主とされる。また、世界の軸神であり、あらゆる神々の創造主でもある。生天光神に対するこのような意味づけが世界観の構築に際しひとつの方向性を与えている。すなわち、あらゆる可能性をその世界観の中に取り込もうとする。

沖繩の伝統的神々も多数取り込まれているが、独特の位置と意味が与えられているのも興味深い。また、沖繩の伝統的宗教では、祖先崇拜や来訪神信仰にみられるように、神を擬人化する傾向が強いが、それが「生天光手記」の神観念の中にどう影響しているのかも興味深い。

沖繩の伝統的神々と日本本土の神話的神々との同一化に焦点をあてるのもおもしろい結果が期待できる。同一化することによって、沖繩の伝統的神々に沖繩という地域性を超えた普遍的性格を与えようとしているかのようでもある。

△空間構造▽

「生天光手記」における空間構造を取り出そうとする場合、エリアーデの宗教的空間認識論が参考になる(M・エ

リアーデ『聖と俗』、風間敏夫訳、法政大学出版局、昭和44年)。エリアーデのいう宗教的空間認知とは、聖体示現の生じた場所を世界の中心としてそこに強い価値づけを与え、そこを起点として世界を再構成するという空間認知の様式である。また、野村暢清教授が北方シヤマニズムの五方観を取り上げられて、それは、神憑る人を中央に位置づけ、それを基準に空間を東西南北に分割した空間認知の姿を示す、と教示されたことも参考になる。

「生天光手記」にみられる空間の構造は、「生天光神その身そのまま」である。「光主」自身を中心に位置づけ、そこを起点に空間が水平的、垂直的に分割される認知パターンを示している。「生天光手記」における「中心」に関わる問題である。宇宙の中心に地球が、地球の中心に日本が、日本の中心に琉球沖繩が、そして沖繩の中心に生天光神明宮があり、「光主」がいる、というように焦点がしばられてくる。聖体示現である「光主」、あるいは彼女の宗教的拠点である生天光神明宮を世界の中心に位置づけていく空間認知の姿である。つまり、「光主」が世界秩序の起点とされる。

「生天光手記」では、中心を起点に水平方向に、四方、八方、十二方、三十六方などの方位観が見出せる。この多様な方位観をみてもあらゆる可能性を取り込もうとする姿が読みとれる。垂直的には、天、地、底と三層に分割される。この垂直的分割も中心と関係づけられるが、地上で中心を定めることによって軸が立ち天界、底界との交流が可能になり秩序が保たれるとされている。この水平的、垂直的に分割されたそれぞれの部分にどのような神が配され、またそれが沖繩の伝統的空間認識とどう関わってくるのかをみるのもおもしろい。

さらに、この「中心」の考え方は空間認識ばかりでなく世界の宗教秩序、人体、人の生き方、社会のあり方などあらゆる方面に応用されている。

空間構造のどの局面に強い価値づけがなされているかをみるのも興味深い問題である。

## △時間構造▽

筆者の関心は、「生天光手記」の中に出てくる生天光神やその他の神々、祖先、あるいは超自然的世界がどのような時間の中に位置づけられているのか、またどのような時間の中に位置づけられることによって聖なる価値を得るのかということである。

「生天光手記」では現代社会のあり方に言及することが多いが、その是非の判断の基準は過去に求められる。特に、琉球王朝時代の土族文化への強い価値づけがみられる。伝統的要素を世界観の中に取り込んでいく場合もその正当性の根拠は常に過去に求められる。より正確に言えば、過去からの永続性に正当性の根拠を見出している。つまり、過去から現在に至るまで永続して存在し続けるものこそ神が創ったものであり、将来へ受け継がれていくべきものであるとの考え方がみられる。従って、永遠の時間に位置づけられたものに対しては高い価値づけがなされる。それは祖先の位置づけ方の中にひとつの典型として見出せる。死後まもなく祖先は不浄なものともみなされる。「光主」が死者儀礼を忌避することからも明らかである。しかし、死後時間が経つにつれて聖なる価値が与えられるようになる。しかも死後の時間が長ければ長いほど高い価値が与えられる。つまり、永遠の存在に近づくにつれて高い価値が与えられてくるのである。

最後に、沖繩では祖先崇拜が現在でも強く生きているにもかかわらず、「生天光手記」では死後世界への言及はほとんどみられない。あまりにも自明のことなので言及されないのか、それとも関心が薄いのかは今はわからない。「光主」が死者儀礼を忌避することと関係があるがあるのかもしれない。



生天光手記 I

(1) 昭和30年 ひつじ年

今一度さとしたまへや神心（こころ）を 知るや知らずやもろ人よ 神は天地におはすのじや もろ人あを（仰）げ神の御光り 神はもろ人を守りたまふさとしたまふ神心（こころ）なり 人々あを（仰）げ神の御光り 旧六月十八日

(2) さる年

我知らずや神の御心（こころ）を 今はなほ神の御心（こころ）がしみぐと身にしてみてわかりし事 今はなほ神の御光り（仰）をあぞぎつたのしく暮し、世の人々は神の御光り（仰）なくしては世はあん（暗）こく（愚）なり

(3) 旧戌年十一月十八日卯日

今日の良き日に申す事 かぞへきれぬ事なれど、今やことをまとめあらゆる浮世の波にもまれし事も有るなれど、今や光をさし出てなほ喜びをあたへるゆへもろ人々あほ（仰）げ御光を

今ひの月もかたがけの、月はしだいにすぎるもの、年月まてば又十五夜の、月もおがみてほくそ（笑）へむ ひると夜（ぼん）とのお守をいただき世は成立つ事なりぬ 老たる人も若人も心をきよめ身をかため祈我（る脱力）が身幸来る

(4) 雨がふらねば世はあらゆる萬物がたまたぬゆへ、この世に人々がそだちえる事は考（えられ脱力）ず、天地のみめぐみにより出来（得）る事なれば、神々の御心中のほどを知らば、人類は心のま（的）とをさだめねはなるまるに、はかなくもあらゆる生物がどのようにすればいつくまでもたもちえる事（自）で有らう事を考へねば、世はまさに化学（科）の世になり、あらゆる天地（愛）のへんかを見出しつつ有がゆへに、しせん世（自）が来る事を願うのみなり

生天光手記 II

(1) 天下大神の御言葉

そなたに今日のよき日に申す事　そなたは我わがひつじ年〔未〕に申した事を思ひ出し、なに事も自分の任〔務〕むをりつばにはたす事がなにより神道、我の道をさとる事なり　この道をさとりなば、そなたに最大の幸福がおとづれるであらう

(2) 真中心〔マコト〕

御下りあそばし生の為人類の為あらゆる事を良き道に道〔道〕びきあそばします事をもろ人は心から喜び御信仰上げる事が人〔の脱九〕とるべき道なる事をつねに忘れる事なかれ

(3) 信仰の道はもろくへあらゆる総〔て脱九〕の萬物の為に神様があたへられた事ゆへに人々の心も身もこれみな神のものなり　なればもろ人よ、おちゆくもをたすけ、たがひにもちつもとたれつ、世の人々も心をあらため、我々は神があたへた人で有事をつねにわすれる事なかれ　よ〔つ脱九〕て、ここに神のさづけをあたへる事ここにきす

昭和三十一年　旧二月二日  
三月三日

(4) 昭和三十一年　旧二月十四日  
三月十五日

(5) 心むなしく思へども、みめぐみ与へる事ゆへに、とまどうなかれおみならよ〔こ〕、世はそちの幸を祝ふのじや夫婦がともに一體となり心をつにしえる事が幸福の家をき〔築〕つぎえる　良い子供を世に〔前説不明〕のである

(6) 心むなしくあげ暮れを、まよへし心も今はなほ、かすみし空もはれば〔渡〕たり、心たのしき時ぞ又くる　世のあらゆるゆられゆく人の心の奥ぞたれぞしる

人の道、神の道、知る人の心はいつしか晴わたり、見よ大海のごとく人生を渡る事、大空のようにひらく事が出来る喜び

(7) 今日の良き日にそなたに言葉よす　これはなに事も世のため人類のためになれば、人類のためとはなに事であらうと思ひしに、そなたや皆の物〔善九〕よくこの事を心にきざみ、ミ〔善〕ティン〔天九〕、これを世の父母になる事〔が九〕で有り、小供のたち

ばにあられる方が世の母で有る事をここにきす

(8) 12方の神とはなに事であらう 人々は言ふであらう とうじは神の言葉をつかふ世の中で有るがゆへに、とうじの神々を<sup>⑩</sup>(12方)、このようにしておのゝつかさどりとなり、○(地球)とあてはめ、世のために、世の

あるかぎり、人類を守り萬物を守る事により世はあかるく、なに事もなりへるのじや

(9) 神とはなに者たるや 世の始めにい出た人間が神で有るのじや 今はなほ国の立つ時で有るがゆへに世国ともに

よき日をむかへる事がなによりの良き道で有る事を我ら神々言う

(10) 人類は皆一つの心になりえる事が人生の光りなり 光なき時は国世じたいがはめつの時で有る 天地を知る事が

一つの御光りを知る良き道のしるべなる事ぞ 光りと言へばな事ぞと人々は言ふであらう なれど光りとは神の御

光りなり 世はなに事も神のみめぐみにより出来、世はなりたつもので有る 神なき人生はあんどくなり 世は神

々がなに事も御守下さる事でありたつ事であらう 御守り下さる神々はなに人で有らうと又言ふであらう なれば

人間はなに事も自分で出来へたと言ふであらう これが人間が物つて生まれた体しつで有る事はここにきす なれ

ど神の子で有り、世を立る人類の事を思へば神々はなに事もすて置く事できぬゆへに<sup>⑪</sup>(十二方)とあてはめ、

いろゝ事を知らしめ、神のつかいを世に出し、世の人々のなにも知らない人類をさとしたまひすくいたまふ事な

り

一九五七年 天一天上日

二月二十一日

(11) 雨日も風の日もこれみな神があたへた事の自然の出来事で有 それにより世のあらゆる萬物は生かへる事が出

来、そして又、いろゝの事が有るであらう 世はこのやうにしてる日も雲る日ある事によつて地球はことなる

ので有る 人間の體肉もおなじくそのようにして出来たもので有る たとへば人間は毎日おなじ心であればどうな

るでせう 毎日くがつまらなくへんな日々であらう 人間はつねに良き日もあり、笑ふ事、うれしい事も有、いろくゝの事が有つて初めて世間を知る事が出来、自分を知ることが出来る事ゆへに、自分をよく、ただしく、つねに心をきよめ、生る事(き説)が人間の道で有る さとりをひらく事によつて自然を知り神を知る良き事なり

酉年 旧二月十五日

昭和三十三年 三月十四日

### 生天光手記Ⅲ

生天光神 生命誕生道の光

#### (1) 生天光御もん光(敬)

宇宙大自然の御うんこう(通)軸 七曜星 大自然の道の光



地球中心根元……八玉…世の一切をうつし、照らし、現世にひらく(八)ヤタノカガミ(魁) 八星はめぐり、宇宙一

切をつなぎ、中心地球にむすばれ、人類の生命につうじ、時、年ともに生れおさめる一切の守護 尊き御世の御道(導)びき 行く末長く栄えまつらん 神明の尊き御光

#### (2) 御もん開きの基(敬)

宇宙大自然の御うんこう(通)のもとに、七曜星、一しゆう間はめぐり、地球中心人類のそだち御所地球につなぎ、生命誕生、おさまり、出入り、めぐる事、人類一切の生命芯で有る。七曜星とは(月火水木金土日)一しゆう間のめぐりで有る星、人類は曜日とあて、星々につうじ、宇宙大自然のほうそくにより一切はなり立ち、人類は立栄へ、生命線はつながれ、天地人はことなる(事成る)。地球中心星で有る。生天光神は宇宙大自然の軸神で有られるゆへ、高く尊き御もん(敬)の御つげ給われ、基開き(キ)致し、はいし(拜)立てまつる事なり。尊き御もん(敬)の御光。

(3) 道の御開き

生天光神を世に御ひろめ立て（奉）ました私の心境 昭和二十九年、神世の御こえのおつげの元に、一切の御教へを受け、世のあらゆる事を知る事が出来ました 自分に与へられた天分と使命、世の為、神世のおつげのもとに、生天光神の御心をとほし、世の皆様方におつたへ申し、御教へを開かねばならぬ身で有る事をつよくかんづるとともに、使命遂行の基を立てましたしだいです。昭和三十年に生天光神名を御開き、五月五日小供の日にて、御はた（旗）こゝのぼり、日の本中心青空にひるがへり、平和の軸立ちませり もろ人の幸、光の御世は栄への日にて、開帳致しました 昭和四十年（一九六九年、旧九月六日）に生天光宮完成致しました。世の皆様方への御あいさつを申しのべさせていただきます。世の皆様方の御協（力）とげげ（はた）により、今日有る事の一切は開け、使命遂行の道を、神世の御つげ（言）とどりにことはこび、御道（道）き御教への基を立てさせていただき、私ごときふつつか者なれど、真実をとほして（言）日をむすび、日々の使命の道光ともし、神世に司り居ります。世の皆様方に御神徳を給われますよう世界平和の御願致しつつ使命遂行の道に進み居ります。世の皆様方の御りかい給わり、御声えん、御しどうの程をお願い申し上げます。

光主 シズ子  
生天光神明宮 渡嘉敷 真昌

宮司

(4) 生天光神のおつげ

昭和二十九年（末年）御言葉のもとに地球を守れ世の人のため人類のために、とのおつげ有り 現在のような（後）かく（兵）兵き造り（センソウ）のたへまなく、世はみだれあらされ、地球人類のためにならず このような時がつづけば世はほろび地球は保ちがたく、宇宙大自然の御うん（道）こうがむずかしくなり、人類はそだちがたく、び（病）よう（悪）まわふ

へ、口で平和をとなへて居ても、おこないあしき時は一切はなり立ちがたく、世界人類の心のうごきにて世は保ち一切は立ち、地球が有る事により人類はせいぞん致して、いとなみ一切も出来、生きさせていただき、現実のすばらしさを味ふ事なり それなのに他の星を目ざし、ゆめ見る事も多し この事は神世よりは、おろかな者どもよとおつげ有り なげかわしい人心よ 宇宙大自然のこうぞうは神により造られ、神によりうんこう致されて居る自然のむすび事なれど自然をはかいし、自然をむしするおこない事は、自分は有れど自分を知らぬ人のかなしさとおなじ事であり、神の御手により一切は生れ、一切はおさまる 人類は地球を尊び、宇宙大自然の中心で有る地球をより豊に、住み良い御所として人類の心のわをかけて、幸福と平和の道造り致す時で有るとの御事、他の星で人類を生む事は出来ぬとの事、人工造りは出来ても神の子自然のつながりがなくなり、立ちかねるゆへ、他の星ヨリ自分の足元である大地をしかりふみしめて、神の子で有る人類は宇宙大自然につながれ、生れ生かされ、一切は一体で有る事を知る事により地球はうるをゐ、人類の良きおこないによつて保たれる事、宇宙大自然とは生命の中心で有り、地球は人類の根元なり 根元なるがゆへに生命の芯で有る大自然を尊びうやまふ心になり、おこない正しく、人類のそだち御所地球を保ち、わざわい造りヨリ心造り致して、良い子を生みそだて、世の光となる後の世の正しき道知るべをしるし、きづくようにとの御言葉を給わり、現わし、道しるべを立て、ひらきます。

(5) ウミチムンガナシイ、トワミカジ、空ウキ、光

三宝大荒神とは、時を現わし三玄単位、三元素で有る。

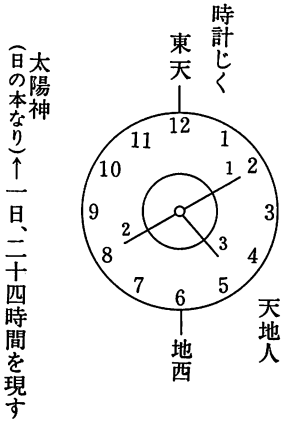
酸素、炭素、水素

ウカマガナシメ

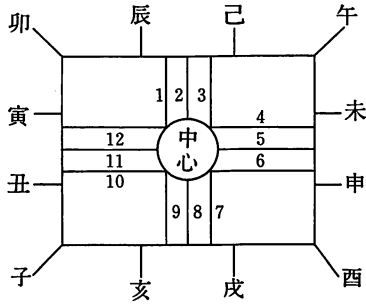
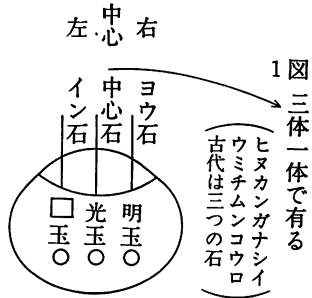
イキカヘテ

三 天 神 (三宝神)

「生天光手記」



- 2 図
1. シンのみ (シンニツウジテ  
時間現れさまる)
  2. ナガバリ (ビヨウ現し)
  3. ミジカバリ (ぶん現し)
- 中心は根元なり



3 図 三玄つつ四方合せて十二玄  
十二支のめぐり

三単位を受け生命つなぐ  
一切の尊き自然の御めぐり

イン石 (石なぐぬ、石ぬうふしなるまでん、石の岩をとなりて、  
こけのむすまでつつがなく自然石で有る)

中心石—は地球石で有り根元なり

ヨウ石 古代沖繩では三つの石を基として立てまつり、はいした事は正しき信仰なり

百八の玉、モモノヒラキ

全宇宙大自然のつなぎ、日の本<sup>元</sup>中心である故に大根元

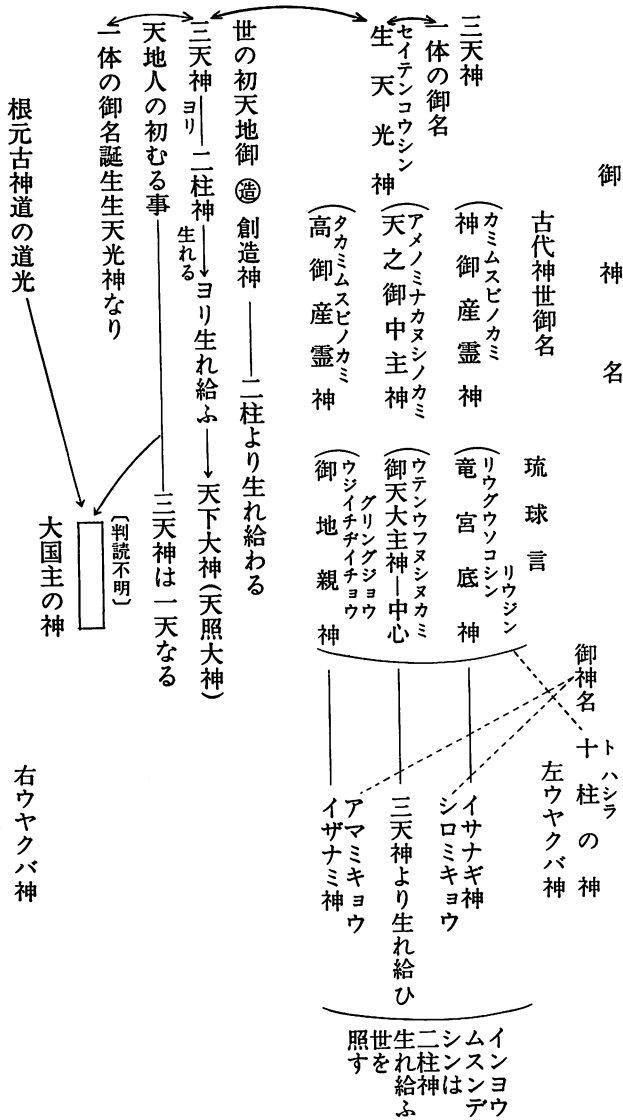
三玉神の御守護なり

サンボウダイコウジン  
(ウヒイ、タカサ、アミセール、ウヒイ、ウヒヌカンガナシイと) 生天光神なり

古代沖繩では一匁のように三つの石を基立て致し立てまつり、朝夕、月初、一日、十五日、上半月、下半月の一切の御おん、御礼、御ほうこく申し立てまつり、年の初ヨリ十二月の御守護の願ひ、年末旧十二月二十四日にて一年中の一切のお礼、御ほうこく致して、かく家庭の一切の道のとどけ、御ほうこく、ぎようじ事御つうち致し、いたらぬ所のお許願いを致し、三天神にかんしやを申し上げたてまつり、人類のいとなみ一切の基を、古代神世の時代に基立てめされたまし<sup>マシ</sup>の御先祖代々のおこないをとうして、現代もなほ尊くはいしたてまつり、生命誕生、御名づけ、星願一切の祈をささげ、とどけ、とほき致され、御造神で有られる三天神を尊くまつられし事。宇宙大自然の有りのままのすがたを現わし、石を立てまつり、一切の神々につうじ、天地御造神、八百八万の神におはします高天原につうじる大所<sup>オホドコロ</sup>にて、基を立て、火の神をつうじ御まつり致す東洋民ぞくはゆかしきおこないで有り、けしてざしんざき<sup>神 邪 数</sup>ようにあらず 世のもろくのあくは心より出づる者なり おこないあしき時はあくとなる おこないにより喜の御光は光明となられ、宇宙大自然のなす所のいん<sup>陰</sup>とよう<sup>陽</sup>の心のさようにより出入致されて居る正しきおこないは喜びを生む 二匁のように時計のはりのごとく、いん<sup>陰</sup>とよう<sup>陽</sup>は喜<sup>喜</sup> あくをこくくとめぐり、二十四時間の日めぐり致されて居る事なり 心のはりもつねに時とともにめぐり心なり かく自の心のはりを良き道にさし

(6)

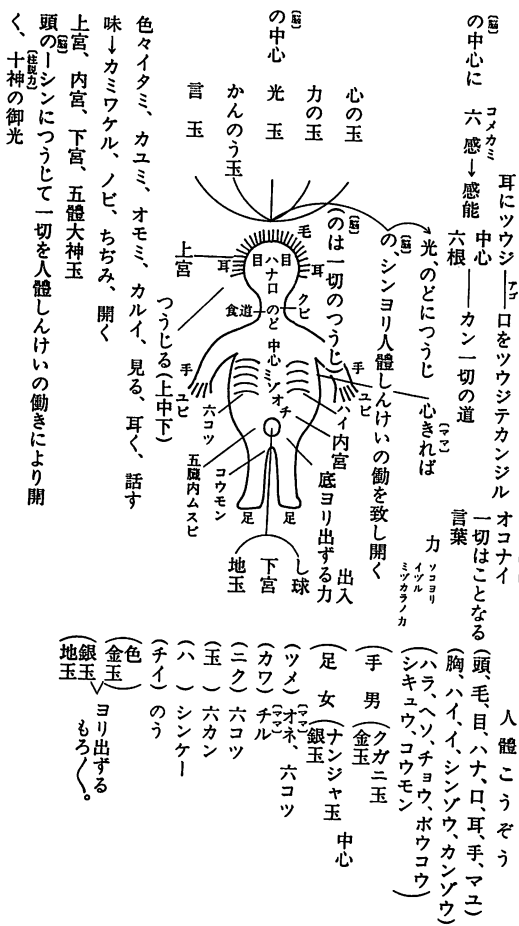
て中心をうしなふ事なく、くるいなく、日々の生話を<sup>〔福カ〕</sup>営みおこなふ事により道は開ける 三図の如く、方位はめぐり、十二支、十二方位に時、日、月、めぐり、三玄ぞくにて天地自然の御うんこうを致され、天地人を御守護給われ、一切の道を知るし、地球人類におおいなる御光を照しめされし御親神、三天神(三宝大荒神)、生天光神なり



かく国々により御神名の現わし方はちがへども一体神で有られる 天之御中主神中心に、高御産靈神、神御産靈神の御うんこうの御心の元に、いざなぎの神、いざなみの神天地に司さどられ、中心に生れ給るし天下大神（天照大神）を地球上に人類の御親神として御下りなされ、すべて天津日繼（御相統）なされた。八百八万神、十柱神（御先祖々をとほし）を通して天下大神（天照大神）に到達し、更に天之御中主神に帰一し奉る。神世の御つげにより一切をむすび生天光神の御名を御ひろめ、神道の一天を御開き、人類の御親神の尊き御神名の御光を給わる。

(7)

十柱神 (生命人體の守護神)



十柱神 (生命人體の守護神)  
 ことばにより  
 オコナイ  
 一切はことなる  
 言葉  
 カソコヨ  
 ミツクランカ

中心に  
 コメカミ  
 中心  
 カン一切の道  
 六根  
 心きれば  
 カソコヨ  
 ミツクランカ

心ノ玉  
 力ノ玉  
 光ノ玉  
 かんノウ玉  
 言玉  
 上宮  
 内宮  
 下宮  
 五體大神玉

のは一切のつうじて  
 シンヨリ人體しんけいの働を致し開く

頭のシンにつうじて一切を人體しんけいの働により開く、十神の御光

色々イタミ、カユミ、オモミ、カルイ、見る、耳く、話す  
 味↓カミワケル、ノビ、ちぢみ、開く

上宮、内宮、下宮、五體大神玉  
 頭のシンにつうじて一切を人體しんけいの働により開く、十神の御光

ことばにより  
 オコナイ  
 一切はことなる  
 言葉  
 カソコヨ  
 ミツクランカ

人體こうぞう  
 （頭、毛、目、ハナ、口、耳、手、マユ）  
 （胸、ハイ、イ、シンゾウ、カンゾウ）  
 （ハラ、ヘソ、チヨウ、ボウコウ）  
 （シキユウ、コウモン）  
 （手 男）  
 （女）  
 （金玉）  
 （クガニ玉）  
 （足）  
 （ツメ）  
 （オネ、六コツ）  
 （カワ）  
 （チル）  
 （ニク）  
 （六コツ）  
 （玉）  
 （六カ）  
 （ハ）  
 （シンケイ）  
 （チイ）  
 （のう）  
 （銀玉）  
 （金玉）  
 （地玉）  
 （ヨリ出する）  
 （もう）  
 （ろく）

心の玉は…めぐり一切の道の光玉

力の玉は…動きを守る玉

光の玉は…一切のしや〔視野〕を開き、世の中を見るかがみ玉

かん能玉…は一切をしいする六感の働きしんけい玉

言玉…は言葉によりコト初世は成り立、はつする言玉一切をしいする

金の玉

男玉

銀の玉

母玉

生み出す榮への玉

地の玉…ヂイチ、ヂイチヨウ、五リン、五臓とは五体内の一切の出入おさめの玉

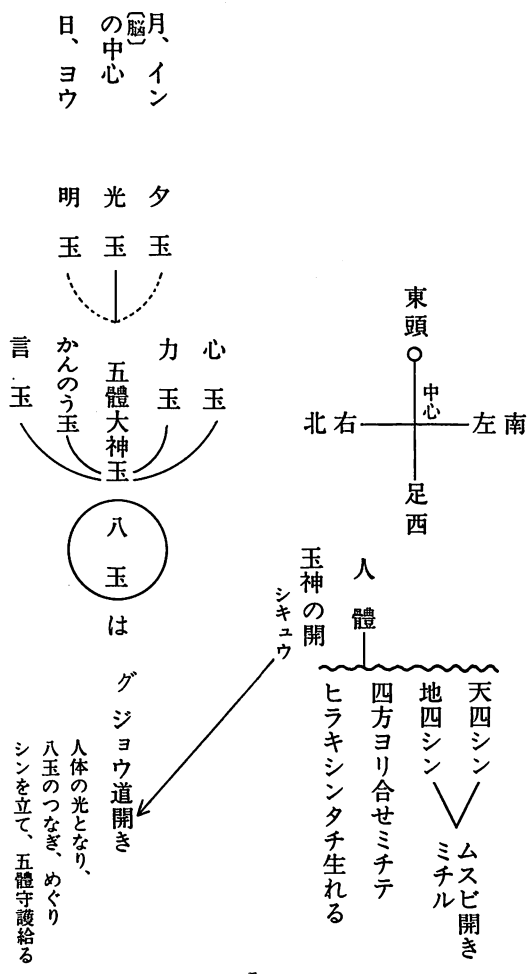
人體のこうぞうは自然〔體〕よりの中心につうじ、かんのうを御与へ給われ、人體の一切のかつどうは成り立ち、一切の

體内外上宮、中宮、下宮つうじ、人體の一切の御〔道〕うんこう、自然にムスビ健康を給わる五體大神の尊き御玉のご守

護

(8) 八玉の御光身のかがみ

人類の生命誕生日は十月十日を トウツキトウカ 判読不明 日で在る 宇宙大自然につながれ、玉神の御めぐみの元に生れ出る



生命の誕生とは、大自然の守護、天地中心軸地球にムスビ、人造 人體は上宮、内宮、下宮につうじ、玉神のめぐり守 月、日、時をめぐり、夜玉、明玉、光玉を受け、生れ、心玉、力玉、かんとう玉、言玉をつうじ五體大神玉にむすび、上宮、内宮、下宮の身の守り給われ、人體は健康で有る 守護神十柱の玉神人體のうごき一切は頭のにつうじ、上宮ヨリ内宮に開き、内宮ヨリ下宮にとほし、もろくを清める

(9) 言玉とは言葉なり 心の現われは言葉の初めなり 言葉は各人の心の現われと自づからの道のしるし、神世より

成り立つ自然のひびき、宇宙大自然に開きつうじる正しき言葉のうるおる榮へ、平和 (合) ムスビ 宝と思へ  
上、下、○、□、△に通じ、この様にして常に文字は人心作用致すことなり。

上—この所に通じた時は、希望、心があらたかになり、身体ともにあらたまる

下—この所に通じた時は、心がめいり、へりくだり、ながされる気物（神ち）になる、もの事はすべて地下に納まる、下る  
そうして底より出ずる清き人の心

○—この所に通じた時は、円満、心はなごやかになる 身体共に健康になり、和合、平和、真実心

□—この所に通じた時は、心はむづかしくなり、人体はひきしまる、四ちん、十二支に通づる 四角は世間にも値し、言葉、義理角を立てる

△—この所に通じた時は、定める心が立ち、迷いを解く心が立つ、人体が清められ、一切はまとめられる 三角は、

三天、太陽、月、地球の作用で成立つ、ムスビー一天で有る

此の様に、文字と言葉の成り立ちによつて心と身体は作用される

(10) 全宇宙大自然をむすぶ玉神

夕玉—(イオン)  
(ヨル)一切をおさめ、しづめる御守護

光玉—(シン)  
(マル)身の内外一切の中心御守護  
(ヒル)

明玉—(ヨウ)  
(アサ)一切を開く生む御守護

生天光神（ミチン—テン大カミ）で有らせられる (三天一神)

(11) 古代ヨリ言ひつたへられし(ヤタノカガミ)は八玉神の御カガミの道光で有れる 生れ出て、人体の御守と人類

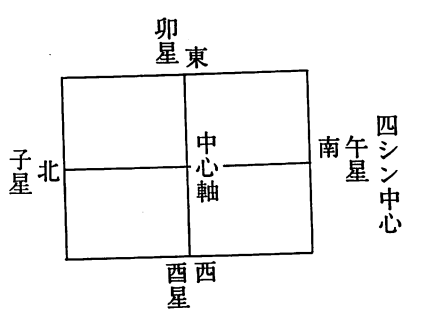
の一切のつながり、自然とのムスピを給われ、生命は保ち、豊かな地球のうるをる榮へを御守護給われ、みかがみにヨリ一切をうつし照らし、道の光となられた明け玉により世は明け、光玉により中心ムスピシテ光は照らされる

夕玉にて夜の一切の御守護なされる。心玉は人体につうじて一切を知る 力玉は底ヨリ出する力、一切は開く 感能玉は一切を人体とほして、六感にしんけいの働きてつうじ、感じ、とく道、言玉は人類の一切のしきを取り、

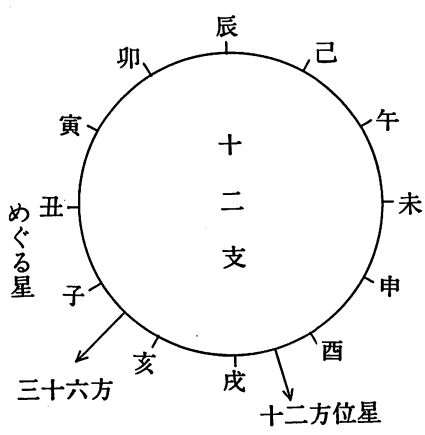
初め善悪の道を正しくよりわけける 五體大神玉は体内外一切の御守護 八玉、一切世の初め人類の生命の光根元なる天津日継なされた(天下大神)、御先祖代々とほしてつうじさる八玉、ヤタノカガミなり

(12) 人類の生命と生活(指カ)につながる星々の現われ

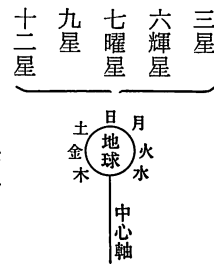
図の如く、大自然の星々が守護、銀川(河カ)ケイを中心(指カ)に星々のざ有り



- 一、白星
- 二、黒星
- 三、碧星
- 四、緑星
- 五、黄星
- 六、白星
- 七、赤星
- 八、白星
- 九、紫星
- 色出し
- えんむすび



全宇宙



(13) 暦と人類の生話

日の元中心に一切は生れ、おさめ、めぐり、自然の一切の御うんこうは中心をくづさ  
 づ、地球に軸芯立てめされ、人類を中心として生み出され、星々につうじてムスバレ、  
 宇宙とほし、ムゲンヨリつうずる星々の御光

暦は人類の一切のおこない、生話の中心で有り、自然御そうぞうの神の御うんこう給わる一切を、方位、十二支、  
 星々にきさいし、知らしめ、時を知り方位をさだめ、日々のおこないなされた事ながら、現代は一切を暦に知るし、  
 時計に現わし、ふじゆうなき生話のきを立て、いとなみ居る事は、すばらしき現代人なり、なれど今現実に人類  
 の心おくれ有り、一切は自然の御めぐみと神々の御けいかくの元に、人類を地球に生み給われ、日の元中心に生心  
 を立てよとの道知るべを暦にしるされし事、生み給もうた神、生命しんを立てまつる心を造り、自分に与へられた  
 使命をすいこうする事が、天地御造の神、守護神につうじて生れ、世に立ちた事のかたち有るものなり、図の如  
 く、全宇宙大自然の御うんこうの元に生れ、生命は中心立ちてせいぞん致す事、暦に現わし、一切は神々の御しる  
 しなり、人類は歴史と当る、常に生話をいとなみ居る事ゆへ、その一切に感謝致すべきで有る、良き月、良き日、  
 良き時を御恵み多く、おのづから人生の道も開かれよう、月日巡りて地球は人類のそんざい地、中心となる、人類  
 は生れると星名を給われる、何星の人、何相の人として、一週間、曜日と当て、暦に記されている様に自然のつな  
 がりに御守護あり、生天光大御世の御紋は一週間御紋とお下し給わる事なり、よって、毎週日曜日を感じ日と致  
 す、生み給ふ天の光で有れる、人類の尊き御親神もろもの御守護、生天光神

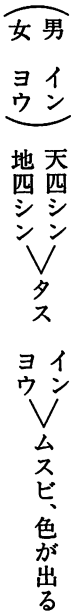
(14) 天地人

宇宙大なる御うんこう(運)の元に神々の御□の御動き(働カ)により、一切の星とつながれ、地上に人類を生給われ、天と地と人のムスビ、芯中心に御立てに成り、世を開き、国栄の基礎となる 地上に初御下りの天下大神（天照大神）は人類の初目開き、天地の中心、地球にコト初（ウミナイビ□メ、ウミ給ふ母、ウミシグワ世 天にては御玉、日神生む力、母神なり(海底ヨリ地けいは生れ、出入致す) 天地につうじ、中心立ちて、海底ヨリムスビ引力、よせる力ひらく力生む事の天上天下一切の大なる自然の芯なる天元御中主神につうじて、天地人一タイ、一点となる 人類は各人の守護神とほして、先祖代々の御玉神につうじて、八百八万の神の御めぐみにより十神の大なる御玉の御守りによりムスバレ、生天光神の御光の元に生れ出る事なり 天地人の道の光

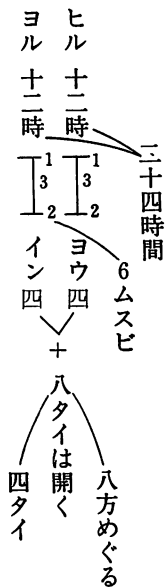
(15) 米寿の光

自然ほうそくと男女のムスビの有り方

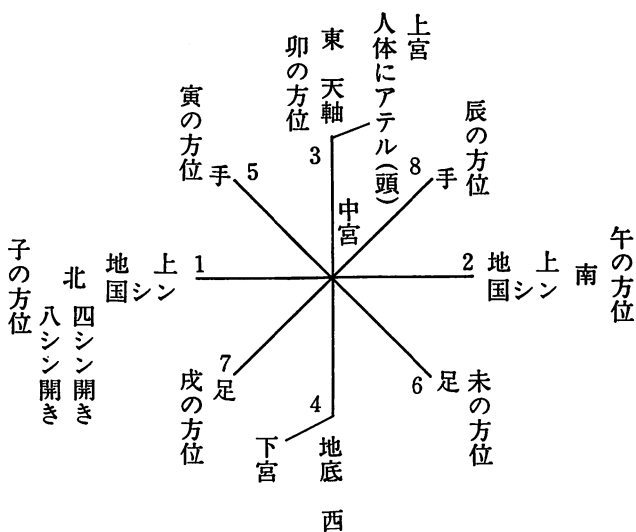
男女は八ガタ(形)にマハリ、ツナガル



四十四ノ玉、四四二はムスビ初



「生天光手記」



中心合わせて九神  
 天地人とアテル 三三九(度)トウ、男女ムスビ祝  
 3 テン有る

図の如く、男女合せて八方のめぐり、男女人体合せてムスビ体は二で有り一で有る一心(同)どう体の道なり

四十四、ヨシシタスヨシン、天地ツウヅル、シン立ムスブ八は開く力八月めぐり十六日、萬月ムスビ、芯の軸 長生命、米寿祝も八月八日に祝開く 自然ヨリ給わる生命のつながり祝ふ

男女のムスビ、生有る一切の幸、月日めぐりて地球人は生れ、そんざい致し、方位四方、八方、三十六方めぐり、生れ入り、インヨウのつながりによってめをと(要)をムスビ給われる事なり

(16) 生天光神とは、天軸生命の芯で有らせられる(三天神) 御

名を生天光と御ひろめ給われし事、人類生物の御親神、生きた天の光で御はず事なり 光は私をおつかわしになられ、御神名をあげられた事は、現代の世情を御らん下され、今マデ(各)かく国々にいく人もミコをおつかわしになられ、神仏をとほして御教へ出されたことなれど、人心はむづかしく、世はみだれ、現在

世界各地ではあらゆる信仰の事でいろんな問題が起っているが、それは遇かな事(原カ)でなくて何であろう 私達人類が信仰する異儀(意義カ)は、乾らびた心(ヒカ)をうるをし、苦しき事をしんぼうし、なぐさめていただき、あしき心を清め、良き道に

導いていただく神聖な事で有る筈(ハツ)なのです。それにも拘らず、世の状態はどうでせうか。同じ地球上に住む人間同志でありながら争いの絶間はない。此れでは悪幣(「悪」)やあく(「悪」)に引回(「引」)されていると言ふても過言では有りませまい。曾て、キリストは愛を説(「説」)かれた、仏シヤカは平等をとかれ、しかもその執(「執」)をも失(「失」)つては社会生活(「生活」)は成り立ち、又は営めるものではない。それは私たち人類が良くわかつている事で有る。この世に真実なくてはやみ同然で有る。今までに愛をとき、平等をとき、理もさとし、す(「きつさい」)く、み(「カガミ」)がきの道知るべを世界に、ミコを通し、出されたなれど、現実は道色々にあやつけて、神に司さざる人も仏に司さざる人もこりつ致され、みかがみはくもり、みにくい事有り。全宇宙大自然はむ(「無思」)じ致してあらそふ事多し。口ではとなへて居るなれど実がない。なぜなれば大自然より生れ、生命はつながら保つて居る生命で有り、自然親神より使命をさづかり、各地、国々にま(「マツ」)ちした神道、仏道で有るにもかかわらず、神に司さる人々、仏に司さる人々の争いのたへまなく見ぐるしきさま、全宇宙大自然を御守護給はる親神はおろか者どもをいかにせんと御(「御」)あいぶかく、御心(「心」)つうの余り、中心天下大神(天照大神)をつうじ、生天光神の御名元に御教へ給はる事なり。生天光神は、愛もとほし(キリスト)、平等(シヤカ)も理(天理)もつうじて、清め(「清」)(セイチョウ)、は(「理」)らい、す(「教」)く、御(「世」)あいぶかくたれたまる、誠の実で有る真実の軸中心(生天光)を御立てに成られたので有る。人は生命の誕生から生有る内は神世の御守護いただき、せいぞん致す事、世を去る時は仏に納まる。よつて神仏は人とは切りはなす事の出来ないつながり(「つな」)で有り、天地人の道のたどりで有る。宇より生(「有」)出で無におさまる、光となりて自然につな(「つな」)がるリンの光、人は皆行きつく所、宇で有り無におさまる。たま(「魂」)しは生(「魂」)きど(「魂」)うし、つねに生れる。それ由人類は争ふ事なく、互いに神仏を尊び、正しく、大自然にまします御親神を各人の御守護神をとほして、身近かな父母、御先祖代々をつうじて全宇宙大自然の御うんこう御造主、生天光神なり。おのく各人が心造りを致し、愛のむすびが出来、一切はなごみ、世界平和のかぎは人類の心に有る事を知り、口でとなへてもじ(「実」)つ(「行」)こう致す事の出来ぬようでは神心にそるがたく、人類は心よりわき出するゆたか

な泉をおし出す事にて平和のみのりも有り、地球にすばらしい人類の生活がいとなめる。地球こそ人類の生命のみな元（源）で有る。生命の生れ入れは大自然のなす御（業）はざゆへ、心正しくあらば自然につうじ喜びとなる 誕生一切は生天光神の御神名におはし、御守護で有る生天光神なり

(17) 天の御恵み尊き御光

御世の初めに天下りめして、愛の御めぐみ、一切よろづの道光、永遠（遠）に栄への基礎として、神世の尊き御言葉の御教へここに開かれり 人類愛喜御守護、と光さし出で、万民の安たいはかられて、世界にとどく愛の神心 万面平らに致される神心（心）づくしにおはされる、世界平和の道の光琉球宇龍真の島に立ちませり 世界を照しめされる大御世の御心尊く芯立ちめして、中心開きの天の岩戸（イワト）（百開き）（アンマイワト）、世明の幸はこうごうと天軸地上にムスバレテ、根国、底神、全宇宙をめぐりめぐりて中心にひらく力は自然につうじ（百開き）、神世の光身にうけ、生れ、世の中地上に生命保ち、人生ころろをゆるやかに渡る。教への御言葉身にしみとほし、世界のたび人々、人生の路は一生とほしてくるなく歩む心のいこるの道光、その日くくの心のかどで、諸人いつも自分の足に力を入れて、大地、地球のみのりをたたへ、世界にとどく愛の心栄への国の沖繩に高き尊き御光の人類愛喜平和の光 日の本中心基礎として、生天光宮に御（御）はた高々と、大空一ぱいひろがる栄へ桃開き たんご（編）のせつく軸立ちて、こひのぼりはまらおよぐ 世界の小供の祝ふ良き日、栄への御はたひるがへる。人類よ、目をさませ、心のまどを開け、真実をとほし折れ、モロ人モロともに世界に平和の来るように信ずる心に光明給わる。

(18) 正しき信仰の有り方

第一、自分の心造り（御清めのぎよう、一切を清める事）、自分の守護神にかんしや致す事  
第二、両親を尊ぶべし（にくしんをだいじにする事）、父母、先祖代々にかんしや致す事  
第三、家庭和合（住む家守護神、土地やしき神に）生れやしな一切のかんしや致すべし、火水の御ちん

第四、せけん人に和合（せけん口を気にしない事、つねに□リカビを良く言ふ）、各人の誕生した國神にかんしゃ致す事

第五、人類の誠の御しるし、真実の心（自分の心の芯を立てる事）、心を中心に立て、きめる事

第六、人類の輪をむすぶ心（自分の心をつねににおいてに合す心がひつよう）

第七、平和の心のつうじる幸（自分の心をつねに明るくムスブ糸のわかける事）

第八、信仰のほんとうの初まりは、自分の心の中心を立て、見開き清めると、そこより初まる この心になりへた

時、自然に与へられる力、めぐり／＼て、ムスビ正しきはんだん致し、喜の心になる事大切なり

第九、にんたいどりよく、苦をこえて一切を見開き、底ヨリ出する身づからの力は神世の御下し給わる喜びの光となる

第十、生み給ふた神、中心で有られる天下大神をつうじて生天光神に祈をささげる時、一切は御守護給わる生命の

幸

(19) 人は皆自分を知る事はむずかしい、おの／＼に使命を受けて生れながら、自分のシンのすがたを見る事の出来ぬために、あらゆる苦しみを受け、道草致す事多し、なれど、正しき信仰致す事にて、神世に近々と自分より出する一切の心をつうじて、自分が出てつうじ歩ませてくださいたく事の出来る喜び有り 天分使命は（皆人類）の中心なるがゆへに良くかみわけて歩みおこなふ事にて人と人との尊きめぐり合せの世界造りで有り、第一歩で有る。もしも一人／＼が使命をくづし、心くづれ致す時はめつ致す時で有る。なぜなれば、一人の喜のおこない使命すいこう致す事で、喜のひろがりは萬人に喜がつき芯が立つ、よって、一人／＼が自分を知り、天分をさとり、使命をはたす事にて世は安たい、後の世にこうせきをのこし、善を受けつがせる事が出来る 現代の世相は、まよる人多く、くるい人多し、なげかわしい事です。自分のがよくをばらい、知らぬ事を学ぶ心がないために、いろ／＼と自

分でのたうちまわる現<sup>(「状」)</sup>じうで有る。神世は御心をいためられ、御しんつうのあまり、御じあいぶかく、各国々に学びのきを御立て、神司を世に生み給われ、御さとしなされる事なり 神心をむし<sup>(「無視」)</sup>致す事なく、人類の心が神世の御光をあほぐ心になりえた時、すでにすくわれ、自分の使命すい<sup>(「遂」)</sup>こうに<sup>(「行」)</sup>方向さして居るしよこです。その時、神世より生れ、生されて一すじの御光を受け、自然に天分を知り、人生のすた<sup>(「スタート」)</sup>とを致す。人道をふみはず事なく、使命を知り、すいこう致される事です おこないは人類にとって一番大切な事なり おこないより出ずる一切のく<sup>(「苦」)</sup>ら<sup>(「差」)</sup>く有り、たへる心と力、見聞とゆう<sup>(「勇」)</sup>き、自分がつよくなり、せけん一切の御べんきよう成れる 神世は一人<sup>(「てい」)</sup>の<sup>(「脱力」)</sup>心を立てさせるために世人をつかわし、あらゆるあくの道にふみまよ<sup>(「てい」)</sup>つる人々を御すく<sup>(「物」)</sup>る給う御心なり

あらゆるつらさ、苦しさ一切は有る事により、一切を味い知る事が出来、良き人ぶつは生れるので有る (ちえのネリ合によつて) いろいろと自分をいぢめる事なく、すなほに苦しみ<sup>(「忍」)</sup>にたへる事、にんたい<sup>(「耐」)</sup>つよ<sup>(「勇」)</sup>くどり<sup>(「力」)</sup>よくする心がすばらしい幸福の道知るべで有り、この事は、皆知りながらじつ<sup>(「実」)</sup>こう<sup>(「行」)</sup>力のいたらなさにひげ<sup>(「懸」)</sup>きを<sup>(「懸」)</sup>生む事多しゆへ、かんしやの心がたりぬ事、まづ父母を信ずる御先祖代々の道につうじ□□やと中心立てるべし するとおのづから一切の道は光となり、ひらかれる。

正しき信仰とは、まづ自分を良く知り、おこない正しくする事

次に、父母に孝をつくす事、かんしやの心が大切なり

次に、先祖代々にかんしやの心をつうじねん<sup>(「本」)</sup>じ<sup>(「本」)</sup>る事

次に、生<sup>(「ワタシ」)</sup>国<sup>(「国」)</sup>元、ウジガミ神一切にかんしやを祈る事

次に、住む所にかんしや致す事

次に、神仏を尊びかんしや致す事

すると自然の御親神につうじて一切は安たいの御守護なり

## (20) 現代世相の有り方

人類は皆、おたがいにてらし合せ〔お説之〕の御かがみなり 現代の人々はなやみ多く、それは親子、おんしのせけんの道のくらさ有り 世論は、あらゆるみにくい現実の有り方のむずかしき今、一人／＼の心造りが大切な時で有り、古代よりつたわるしゅうしんの本、神世の初の一の御うんこうを現わした道の開き、学びをうしなつた事は、人々の心のうるをい、ゆめをうしなないつつ有る現代の人々の心のあれ方、あらゆる化学〔科学〕も良き事ながら、ていどをこえては道ならず、かへつて自然〔現〕げんしう〔色〕をくるわし、人類〔の〕にためならず、と神世は御しん〔心〕つつ有り いかなる時代をも、人類はおたがいを清め、みがき合せ、御〔か説之〕かみをくもらせぬように、父母を尊び、世けんをうやまふ、中心で有るおの／＼自分を良き道にみちびき、学ぶ事によつて、すばらしい時代をきづき上げる事が出来、後の世〔功〕にこうせ〔賦〕きつつがなくづくで有らう。世相は今や心のはりの方向が芯につかず、つねに中心をはづれて居る 自分はどこから生れ、生されて居るか知らぬ事からおきる道はづれな〔行〕こう〔動〕なので有る、ゆへ、中心とは、自分の芯、父母、御先祖代々とほして、天地なる神にとつた致す事ゆへ、自分の道より初まり、父母につうじ、御先祖代々とほして〔天地〕神〔仏〕につうじる。よつて、いかなる事も、父母、先祖をつうじぬ時は天地なる神につうじぬ 道はづれのかう〔動〕どうと成る。道正しきは、中心立ちて、父母、御先祖、天地につうじる心が大切なり。人々の心につぐ〔つぐ〕自分の御かがみ〔福〕があいての人〔手〕にうつる事、まづ親の御かがみが子供〔福〕にうつる、又やおん〔福〕しの〔福〕（御かがみが）身かがみが小供たちに現われると、小供たちの御かがみは四方に（上下に）はんしや致す事ゆへ、おとなたちのこうどうを正しき一テンにひらく事、いかなる時にいたつても自然よりうつる御かがみを見て、あらたむる所あらば（し□□有る）おとなの世界よりあらためるべし、すると自然におとなの御かがみにより小供たちはうつる 光はずばらしい身かがみの光となり、上下、四方八方にひろがり、後の世のこうせきつつがなく、石の岩となるまで、萬こうもめぐり／＼てつきる事なく、平和の地球上の宝玉は保つ事なり そして親を信じ尊び、おんしを尊び、学びは後の世

のすばらしき<sup>〔解〕</sup>ざいさんと<sup>〔意〕</sup>なり、良き世相と時代を生む事の出来る道の光となり、正しき人道は自分のおこないと學びによって一切の<sup>〔説〕</sup>しやを見開く事に有る。つねに親子、にくしんのおん<sup>〔意〕</sup>あいを<sup>〔意〕</sup>忘れず、世けん<sup>〔意〕</sup>の合わしを致し、真実をとほす事にて、合せ御かがみはくもりなくかがやけり 健康の元になる 光明給わる事なり

(2) 世界に御子、神司をなせ生給ふたか

各国々に神の子を生み、司をさづけ、神道、仏道を御教へに<sup>〔説〕</sup>とき、世の人々を御道<sup>〔通〕</sup>ひきすくわんがため、よげん者、神司は御心をとほして人類に良き心を造り、世界を平<sup>〔意〕</sup>げく、安国とおはされる、御心平和の道開きで有る天分を与へ、使命をすい<sup>〔意〕</sup>こうさせ給る、人類の生命を保つ世の光で有る。にもかかわらず、世論は、道を色々にあやずけて、神に司どる人も、仏に司どる人もこりつ<sup>〔意〕</sup>致して、各国々の神々の理をひなん致して、あく<sup>〔意〕</sup>まやあく<sup>〔意〕</sup>れいのさたとみなし、れいの働<sup>〔意〕</sup>きをむし<sup>〔意〕</sup>致して、神の御言葉、言玉を知らぬおろかさ有り こと玉をつうじ、かんじ、道を知るべし(れいの口開き)、ミコの御やくめをおろそかに致されし事有り 神に司る人は人<sup>〔通〕</sup>つう力が有りて、初めて人を御教へ道<sup>〔意〕</sup>びく事が出来る事なり つうじる事により知る一切で有る 歩む、かく事<sup>〔意〕</sup>だけでは一切の教へ人とはむづかしく、さん<sup>〔意〕</sup>こうしよう<sup>〔意〕</sup>なりの道開で有る 時はめぐり、年こうはいそ<sup>〔意〕</sup>くと去、現、未<sup>〔意〕</sup>とかわり、時にそうて神々もミコを御つかわしになられる由、世界は一つ、地球中心人類は皆心を一つに致して、自然を尊び、神仏にかんしや致す事にて、大神心に叶ひ、各人の天分を司り、人つう力も出る。自然に正しき人に給わる大御心の光、神司、ミコはつねにお清めのセイシン<sup>〔意〕</sup>を造りおこなふべし 天しようじよう、地しようじよう、内外しようじよう、右左しようじよう、六根しようじようとは、お清大神のはらへどの道につうじ、一切のもろくを清め、いかなる事からもはらへどの正しい心に成るよう<sup>〔意〕</sup>に心を中心につうじた時、底より出ずる自ずからの力、真実の芯が立ち、あくは清まり、善の道につうじ、一切は喜びと成る はらへどの神世は、一切の力を、人類の御言葉に現われ出でて、道は開かれ、はらい、清め給ふ事なり 世界に生れ給ふミコ、神司、人類よ、神世は大いなる御心をとほし、世

を照しめさる事なり

(22) 生天光神の御教へ

心の現われ言葉なり 言葉はおこないの初なり 人類の生活とせうがい(生)においていろく(進)とおこなふ事は、すべての事が天地の神世につうじ、自然の現われとなり、地上人類のそだち所にてかたち造り、あらわれる事なり 地上にておこなわれて居る事が天地一切につうじ現われ、色はへるので有る 自然より下り、自然にしたがい、自然におさまり、出入りの道なれば、人類のおこないがなにより尊く、道の知るべなりとおつげ有り (心はつねならむ、かわりやすかれ、風のまにまに) 一切の心の現われを、身の内よりわき出する一言くが人類の尊きともしびをつけられた御光なので有る。信仰は心の祈りである わき出する泉で有り、すばらしき力で、一切を見とせる(通)心の目で有る。真実の芯こそほんとうのにんげんの御すがたなのです。身の内に神やどられ、頭上より照らしめされる。すい(水)、いき(息)、ともに、みやく(脈)、はく(拍)、せいじ(正)のように有つて、健康にそだちをいとむ事を御守護給われたので有る よつて、生れ出た人類は皆神の子で有る。尊き生命、御親神で有される生天光神を信仰致して、おのくの心の泉、ゆたかなうるをふおこないを、一生の道に心の光照しつつ、しそん(子孫)はんえい、末長く、つゝがなくつつく心造り、安住、安たいの基礎立てめされ、御守護給わる 心有るもろ人よ、ともにかんしやの祈りささげ奉らん言葉正しく、うるをふ人々、愛のむすびも心のにしき、言玉の御恵み尊けり

(23) 生天光神の御恵の歌

一、生天光神の明光、我らの胸にさし出でる、道も明るく美しく、御親の尊き御光ぞ世界平和の道光

二、生天光神の御ひざもと、もろ人来りて祈りなば、おのが身の幸道開き、いつまでも豊かな心□たれる世界平和の祭せむ

三、人類の心にめでし明光、みつつ御光り世に照し、萬物、萬めん(面)よろづ世の、神の御光世に現わるる生天光、世

よろづ世の身に天下り

界平和の門開き

生天光神の尊き御守護給わるなり

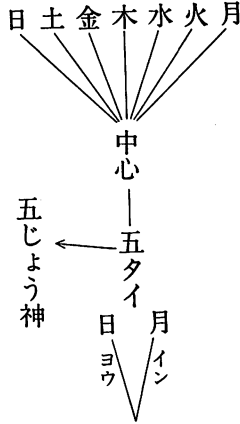
神世の尊き御光を世に現わし、いつの世も万面照らし、子供らをいつくしみ、人道正しく生きる道知るべ、教への基礎ぞ尊くも、学びの窓が開かれり、目度たいく人の幸、祝へもろ人もろともに、生天光(宮)の御祭日

(24) 五月五日の小供の日、かわらぬ親の真心よ、今日の良き日のコイノボリ、皆な心のはたじるし、大空いばい舞

いおどる(のどかなる日)目度たいく人の幸、生天光宮の大祭日、尊き御光り身に受けて、家庭円満国栄へ、人類平和の心のむすび、うるまの島のみのをたたへ、歌へよまへよ、目度たいく平和の光、祝へもろ人もろ共に、生

天光(宮)の御祭日

(25) 七曜星とつながれた人類の生命



つながれて生命誕生致す事。年、月、日、時間のめぐり。しゅうびまわり(周日九)て一切は生きて行く事なり。おさまる時も一しゅうきとなす、七品九品をそなへとして萬物(判読不明)めぐり、おさめ、又生まれかわる。月日のめぐり、五じよう神のめぐみの元に造られ、一切の萬物を食としてえいようを(榮養)いた

ただく。それゆへ、一しゅう間の萬物をお供へ、かんしや申し上げる事。

(26) 七曜星と地球中心軸立てめされ奉りし御事

生天光神明の御もんの道しるべ、人類生命とつながり

ヨウ  
めぐり

日一日の光一切を生かし給わる御恵、生命の幸照し給ふ、生命の水元（ふなもと）（二十四時間日の御守護神）

明（アスビ）—イン、ヨウムスンデ明るい世界人類たんじょうの御守護給わる

月（イン）—月の出にやみよも照し、一切を月めぐりに、明き心もひらかれる愛のみのり、（愛の光、一年十二月御守護神）

火の光は一切（事）ことなり、ひろがる力、人體にては身たいのねつの事、天上にて火星、地上にて火で有り、一切

食、にたき（火力守護）

水は（川）かはとなつて、自然（に脱力）そつてながれ行く力、人體にて、血の道力 水の、ながるる水にそうて心（判読不明）わき出る泉

木のごとく元（ホ）を底にねづよくはり、芯（こ）のびる力、木はみのり、ゆたかに花咲きかほり、実をむすぶ、生命の元、

人體にて健康の元 （タンサンガス） （判読不明）  
サンソ

金（いかり）のようにかたく、つよく、とうほす力、かためなす、いだ（いかり）豊を生む、人體にて、 （テツブン） （判読不明）

土のように一切はかたちをかへてもとどまる力、土の恵の萬物は出入の道ぞ、  
□□が豊かなり、人體にてはい

よう守護神

地球—中心に、星八つ、八玉はめぐり、神世は御守護給す事、（地球は） 人類のそだち所、一切の中心軸で有る。

(27) 心正しき者は福をまねき、清き明るい心は一切をさとる。

良き（コトガラ）□□—ココロエ人と人との心合せ、たすけ合い、合せる事、アハセル心は和むコトを生む∥愛、キボウ、幸福

美しく現われる

信ずる心―信ずるコトは、一切が明るくなり、力となりのびる。心はおちつき和合の基となり、一切はことなり（事成りし）  
オモチ心―清き明るい心で幸福の一生をおくるコトが出来る。

心―中心、底より出ずる心―言玉の開きは喜道、幸福をまねき、つねに福神御守護あり

心の中心―心（めぐる、底心―レンをたてる、真心）、中心に保つことによつて、一切を開き、吉となる。正しき、清き、明るい心―心の光

ウラ心とは、つねにふへいふまんを言ふ、思ふ時におこる。あく（悪）とたんきとすねる心。

あくま―ま（魔）のわざわい、心のすきがあるために魔の入りやすく、あくとなる

うたが―い（不）がふへい（正）にかわり、あくとなり、一切はくらくなる

ウラミー道がトザサレ、タンキヲおこし、あらしになる

アラソイ（不和）―ふわがおき、しつぽう（失）致した時は、一切ははかなく無になる。みにくゐ現われ、ふかう（不）をまねく、あ

ケイベツ―く（不和）とタンキのもち主は一生をとりかへしのつかない事、はめつにおちいる場合あり

ののしる心―あくをぬき、たんきをしづめ、すなほになれば、おこないの道光に照されて、一切はことなり（事成る） 神につうじて心

の光を受け、すくわれて人生の幸を給わる

言玉の開きによつて、みがみ（か脱力）を照し、一切につうじ、おこないの世相、現世の現われなるがゆへに、一切は言葉、

言玉の初で有る。人類よ、目をさませ、神の御恵をおるそかに致さずにおのゝの心を見がけよ、と御ぼしめし給

われ、言玉の教化をここに示して心造り致すコトなり 光主、

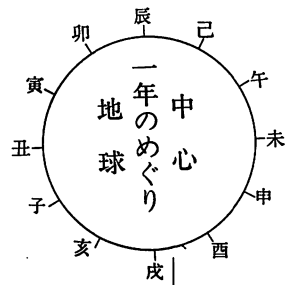
卯年、昭和五十年旧二月十六日吉日

新三月三十日

生天光神明のゆえん御開

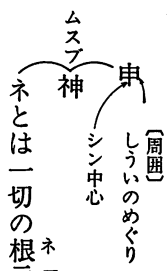
(29)

宇宙大自然との御むすびの道の御さとし



方位とめぐり、時間と月に合せて神の御守護と、人體のこうぞうと一タイとなり、初まり、おさまりて、又めぐり来る一切の生命

神明とは、



天ヨリ下さる申しである

月ーイン、月の出にさしで給わる道光(萬月、十六日) 月の入りにより一切はなごみ、やすみ、(ねる、夜守)

日を合せ、<sup>ノイアカルク</sup>ミヨウトなる、年の初、一月、年十二月御守護神

日ーヨウ、日の守



二十四時間御守護神、日の出のように七色をめし、雲にいろどりひろがる光、  
日の出とともにおき働くコトの喜び一切の活動<sup>イマヒ</sup>

明、<sup>(で脱カ)</sup>イヨウをムスビ、父母神 || 親神 || <sup>アマテラス大神</sup>アマテラス大神 <sup>天下大神</sup>アマツヒツギ給ふ

①、天に司さどり ②、地に司さどり

生み給ふ三天神 〓 生れ給ふ父母神 〓 生れ給ふ天照大神アマテリ 八

卯年、昭和五十年七月十六日十七、十八日

(30)

十柱の神

⑤

竜宮神

御天

中心 〓 生天光神 〓 天下大神 〓 七世

スニンセヤクバ  
地チ セヤクバ  
御天 セヤクバ

天地人のムスビ

(七ヤクバ)

八万ヤ八百コの神

地国神 (国七ヤクバ)

古神道 〓 (ウジガミにつうじる) 〓 (おのく 〓 生れ国)

(31) 昭和五十年卯年旧九月二十九日吉日、

誕生地、ウブウカ神の御つげのもとに、光主宮司一家の生天光神明宮を千代に榮へて 栄えまつらしめる、との御こと、クガに森の神の御つげ、ともに有り 御はたのしるし世に現われて、ナンジャデーキシテ、クガにジク立マツタテて、

クガニ玉アギテ、ナシグワ祝へ、とのつなぎ一切の御おしへ、御守護の御ことば給わる。光主宮司の誕生御守護、

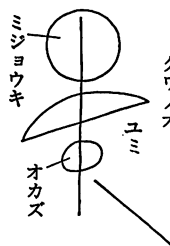
ウブウカ神、クガニ森神の御道の光、生天光神明宮の御はたじるしの一切の中心を御むすび給ふた良き日なり

(東大神とつなぎ) 与郡城村字屋慶名九四五番地に御はた中心ひるがへり、人類生命の中心ひろむなり

(32) 古神道 〓 生命誕生の時

ウブユをいたし、御名づけ致される事。この時にカカンを頭ぶにかぶる、

クワノ木



ゲンキヨイジンブー、ケーブ有りますように

クワの木のでだでユミヅクリ致すのは、神木で有る桑〔判読不明〕の木〔判読不明〕く栄へるようにとの事、まよけにもなる

ミジヨウキえんの中心をさだめる事、力リキとともに元気ゲンキでじようぶな良い子になりますように、天地人の御ムスビの祈

天地神を尊びうやまふ、初生命を守り、頭ぶよりカブリ、御守りながら、世に生れ出た良きを祝ふ カク家庭のやしき中心にて致す事、そのまま日の神の御前にぬかづき、御名をつけ、〔判読不明〕におとだけ致す事、これより生命誕生致し、〔生命〕人生の初むる事、世に現われ出でて、神の御めぐみのもとに、人生の歩みを、おのくの天分に合せて生き、使命を遂行致すものなり

上中心下

山(川)海

ヒダネをワラにこめて、国神の司さどられる川にます神に祈(わらに火をこめて)

三天のムスビ  
生ずる幸来

川にてさん〔産〕ご〔後〕のもろもろを清める(男の子をささきへ立て、カマヲモタシ、ウシロをフリムカヌト)

昭和五十年卯年

旧十月二日吉日

(33) 天神、地神、海神、三天神、生天光の御前開き、生天光神、琉球言、神々の御むすび御開き。

サリー天神、サリー地神、サリー海神、ムスビ、おひらき、ウヒイタカサアミセル、ウテン〔マゴ〕親神、ウ地親神、ウ竜宮神〔竜神〕、自然造り、自然こうぞう一切の御守護まんぬうしでがーフデービル、ウテン七ユウ神、ウジチ七ユウ神、

竜宮七ユウ神マンヌウシデガフウデビル、ヂチ四シン、ウテン四シン、中心守り、日の守り、夜の守り、日の二十

(35)

巳年、昭和五十二年

四時間御守マンヌウシデガフデービル、月守り、フシブシ守<sup>(星)</sup>、十二支の守護マンヌウシデガフデービル、六曜星、七曜星、九曜星、二十四<sup>(四季)</sup>、シキ守り、二十八<sup>(首)</sup>、シユリヌ守り、方位三十六方、三十六神の御世、一切自然親ガナシイ、御先、御中、今、先祖代々、父母神に天下大神ヨリ、十神の御世、方八百神、生天光神の大御前にかしこみく申百く、神心なごやかにきこしめしめさせ恐みかしこみ申百く

(34) 神拝詞、初三れい三ぱく、お開のき<sup>(座)</sup>

掛巻も畏き大御世、生天光神の大御前に恐みく申百く、今日の良き日、良時を向はせ給ひ、ただ今(なん時)の御<sup>(祈)</sup>き願、御礼御開き申し立てまつる<sup>(奉)</sup>。自然界の一切の御恵み、自然の大いなる御恵みのもとに、我ら人類、世に生み出しめされ、おのくの道に御光を給われ、人道の歩み一切のちしき、知らしめ給る、ふうふむすび、愛合給<sup>(実)</sup>る、しつらえ栄へ給われ、国々の守り、萬物の御恵み、萬事一切を世に出しめされ、ちしきをひろめ給る、働き一切の御守、金せんの御恵を与る給る、現代になにふじゅうなき世を造り給る、御守護給われる事の尊き御事、大御世<sup>(奉)</sup>八万八百の神、自然親神生天光神の大御前にかんしやお礼を、恐みく申百く

人類に誠の心をつくさせ給る、まさるぶぢ<sup>(無事)</sup>、安たいの御守護給われます事を祈り立てまつり、人たいの御守、健康と幸福を与る給<sup>(マ)</sup>し大御世の御じあいと御めぐみ、心造り、おさとし給われる事の尊き御事に、十神の大御世にかんしやお礼をかしこみく申百く、なお一そう、健康の元に立ち働かしめ給る、御守り給へと祈立てまつり、家内安全、屋敷安全、交通安全、身の守護給われ、もろ人の上に幸へ給る、すべての喜びを与へ給へと祈立てまつり、人類の幸、平和の御<sup>(祈)</sup>き願申し立てまつり恐み申す。みあいのもの供へ立てまつり恐みく申百く。神心なごやかにきこしめせと恐みく申百く。

三れい三ぱく、オヲサメノギ

旧六月より七月、八月六日マデニ国神ムスビ 光る世ぬ主 国めぐり ミハタ、七日、上げ↓八日に開く  
 巳年旧三月二日に国玉の開き御下りがこの生明殿に、国王と神司、君々の現われにより、又神のおしらべと御神ゴレンシい  
 により、ほうびつ（愛美丸）を御下され、御言（このり）により、国（歴）れきし、オモロ、かんむり、かんざしを御下給われ、この年生明  
 殿にて古神道の道を教へみちびき、琉球神道の教へを御守り下さるようにとのおつげ有り、琉球古神道について、  
 司人が男一七名をよせ給ふとの事、夕べ、神子七名、ミコ九名をよせるとのおつげにより、光主、さつそく三月三  
 日、この吉（よ）を生天光神明の御前に御ほうこく致しまして、安たいをはかどるようお願い致し、吉日の喜びを申し上  
 げ、国家の道の光御下し給われた

昭和五十二年旧

二十三年前  
光主——未年の月

天地人の(神)ムスビ

ユヌ主——巳年六月六日生

巳年九月三日にウブクお供へ奉り、ムスビ一切を祝ふ

旧九月六日、三天神御こうりん給て、二十三年祭、十三日、例大祭を開き、祝るひろめし事

(36) 昭和五十二年、巳年旧十月一日に初まる海神のめぐり

十月二日、名護に下る、ユヌ主の宅、豊実宝開き

十月三日、日ようびの開き、天地人の初むる道の光をさしで給わる、福笑(福)びらき、地球上中心に開く (自然  
 と人間と良心、自然はつこう、良心じよう愛、コウジ七色かわり、イロツキつつ力出ずる) り（竜）う王、りう玉開  
 き、地上に幸福を実らせ給ふなり

旧十月十三日 13<sup>3</sup>/<sub>16</sub> ムスビ、吉日、生明殿にて  
 新十一月十三日

十月四日、午前六時外宮にて

旧十月四日 14 4  
新十一月十四日 18  
+ 開く、吉日、

陽神石 ナンジヤアシ  
ナンジヤカムリ

中心神石 クバザアシ  
クガニカムリ  
一切七色、ヨニ色ハエテ

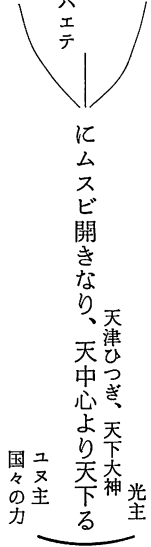
陰神石 タネモノザアシ  
天地の光

三天神、八百八万神

生天光神明 父神 天下大神中心  
母神

礼儀のじゅうじょう

神へ↑光主↑ユヌ主↑宮司↑信徒



(37) 昭和五十二年、巳年旧十月一日吉日

生天光主にクバ王より御言葉を与える

光主につうじて

ミウンジユウ、ウタトクルヌ、ウナサキユ、カユワスル、クガニダマ、ササギアギヤビラ、イチムイチマデン、  
ウサガイユミノソリ、ウンジュウ、ウククルニ、ウミマキユミノソチ、イチムイチマデン、ウカナサユミノソチ、ウフ  
クキユミノソリ、マグクルヌイトキンヤ、イチマデンムスデ、ウナサキヤ、イチマデンカユワシユミノソリ

(38) 昭和五十二年、巳年旧十月十四日吉日

生明殿にて、午前中のお開き給わる、国王向真としうとく太子に祈る事の道の光、光主への御下し給われし御言の  
りは、伊勢皇太神宮におまねきの時来る、その時は、天皇后ごうを、宮城にて、とくの道のさとし、ともに神つな

ぎ、国つなぎ、安たいのはからいをよろしくとの事、したく一切、ん一切、のりもの一切をお立て給われし事、国人よせの道開きを給われて、神明の御心をとほされた事、(英)えいそ(世)つうじて、辺土名、父神より(英)えいそ(世)をつうじ申し、ユヌ主の母と二人が見えて、金(車)コと車がとどきしおつけ有り、幸出ずる吉日、光主よりユヌ主

(39) 昭和五十二年旧十一月二十六日吉日

午時六時、(聖)しやう徳太子の道の御おしへとくがね開き神社神道の道は、皇家、国家の立ち栄へで有り、琉球古神道は古代より大自然御天(天)、日の元根元を中心として、世界ムスビで有るゆへ、内地と琉球とは親子ムスビで有り、古神道と神社神道は一タイ神で有る、しやう徳太子の御下りを生天光神明宮にちんざまして、今日の良き日に琉球国王との道をあきらかに光主につうじて、国家安泰をおはからい給われた。光主、神司に一切の御恵を給われ、御守護給わるおつけ有り